

「誰も来ない図書館」再論

土屋俊

2009年1月7日

学術情報電子化の帰結(1)

- 図書館の保存機能の終焉
 - 物質的なものは空間に位置しなければならない
 - 情報は本質的には物質的ではない
 - したがって、情報は空間に位置する必要はない
 - ただし、これまでは物質的媒体が固定化と伝達のために必要であったので、情報は空間的に位置せざるを得なかった
 - 電子化によって、物質的媒体は不要となった
 - したがって、図書館は学術情報を保存する必要はない

学術情報電子化の帰結(2)

- 図書館の共有支援機能の終焉
 - 「そこに置いておいてみんなで使う」ものは、電子化によって、「置く」ものではなくなっている(教室の机は、共有物であり続けるだろう。電子辞書が象徴的。あんなもの共有する気がしない)
 - 図書館間協力するくらいならば、pay-per-view
 - さもなければ、機関リポジトリ ⇒ 自館利用者以外の利用者の共有を支援しているとはいえるかも

ということで、なくなるとして、

- (日本の大学図書館の)反省
 - この蔵書の「不適切性」をどうしたらよいのだろうか
 - この予算の無駄をどうしたらよいのだろうか
 - 利用されるということはどういうことなのか(貸出?)
- 学生のための図書館としての機能
 - 研究者については解決済みとして
 - 「メディアホール」に期待はするが名前はなんとかしてください
 - コンピュータクラスタだけなら図書館がやることはない
 - 認証？

ということで質問は皆さんに

- 資料の保管場所としての図書館をいままでわれわれは図書館に求めていたのというのは本当なのだろうか。
 - (国立大学図書館の蔵書構成の学生の評判は最悪である)。
- また、大学は図書予算の管理者としての図書館を求めていたのでしょうか
 - (図書予算に理解のある教員は非常に少ない)。
- 勉強場所としての図書館を学生は求めていたのでしょうか
 - (他にそういうところがないから来ていたにすぎない)。
- もしこれらの問いに否定的に答えられるならば、それこそが誰も来ない図書館の存在理由である。